

## 遺伝子バンク

30年

三島・国立遺伝研

15

1990年代後半、DNA塩基配列の解析技術が進み、日本DNAデータバンク(DDBJ)には従来のように少数の遺伝子データだけでなく、数百から数千件のデータが一括登録されるようになった。さらに、95年のインフルエンザ菌を皮切りに、個々の微生物の全ゲノム塩基配列データが発表され始めた。

95年2月のDDBJニュースレター冒頭には、急増する大量データの登録について「受け付け処理に多くの時間と労力を要しますので、登録される方には迷

## 大量データ時代の夜明け



惑をかけていることもあろうかと思えます」とある。それにしても納得できない件があったと、90年代にDDBJの国際諮問委員を務めた磯野克己は振り返る。

96年秋、あるゲノムデータが登録後4カ月近くたっても公開されていないと知ったときのことだ。それはシネコシステイスという藍色細菌のゲノムデータで、

微生物の全ゲノムとしては5番目、光合成生物の全ゲノムでは世界初だった。

なぜ公開が遅れているのか、磯野はDDBJの責任者にメールや電話で説明を求め

1996年4月のDDBJ国際諮問委員会。左から吉川寛、郷通子、磯野克己(五條堀孝遺伝研名誉教授提供)

た。「データの構造や意義を理解していれば、どのレベルのデータをどのタイミングで公開すべきかもっと適切な判断と対応ができたはずだ」と磯野は首をかしげる。

データバンクの仕事は「縁の下の方持ち」であり、研究者の間では低く見られることもある。しかしそういう仕事を率いる人にこそ自ら骨身を削る姿勢が求められるのでは、と磯野は語る。データバンクの意義とあるべき姿を考えて時間と労力をかけなければ、利用者の支持を集めることはできない、と。

(伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員)

...つていた宮沢三  
郎は、山崎に事細  
かな指示はせず、  
計算機に打ち込む  
コマンドのリスト  
を渡したただけだっ  
た。ただ、計算機  
が止まるとすぐに  
対応してくれた。

遺伝情報研究センタ  
ー 計算機室での宮沢  
三郎(右から2人目)  
1990年ごろ

...全開で進められ  
られた。国際プロシエクト  
に相応の貢献をしなけれ  
ば、後々データへのアクセ  
スが制限されかねない。D  
NA解読システムの高速化  
と大型化を進め、それに合  
わせてDNAデータの登録  
と公開も迅速にできる体制  
が必要だった。そのために  
はDDBJを強化するのが  
自然なシナリオだった。

(伊東真知子・国立遺伝  
学研究所特任研究員)